

図書館の価値を示すための第一歩

いちこ
市古みどり

(理工学メディアセンター事務長)

1 なぜ価値を示したいのか

理工学メディアセンターでは、研究者の生産性に関する調査を開始した。

図書予算は、電子資源の高騰にもかかわらず、その増額が認められないばかりか、2011年度予算はついに1,500万円を削減する結果となった。メディアセンターは利用者が必要とする資料をできる限り確保し、最高の人的サービスを提供することによって学習・教育・研究・医療を支援することを目標にしてきた。その目標達成のためには少なくとも資料値上がりに対処できる予算が必要であることを義塾経営者および経理・管財担当に繰り返し説明し、何とか予算を確保してきた。しかし、もはやこうした説明では理解を十分に得ることが困難となっている。メディアセンターはこのことに限らず、関係者からの理解を得るためには、具体的な数値や調査によって図書の価値を示す方法を考えなくてはならないと思われる。

図書館の価値を示す研究は、多くの研究者や図書館によってなされてきた¹⁾。かつては資料が最大の価値を生むものであったが、資料が電子化され、資料を探すためのツールが開発されて以降、図書館員の役割に価値を見出す必要性を主張する研究者も多いようである。しかしながら、まだまだ図書館員が研究コンサルタントやプロジェクトマネージャー、研究データの蓄積や相互利用といった領域に入りこんでいない日本においては、論文・会議録等の執筆数や引用数に対する助成金獲得との相関といった従来からの調査によって図書館の価値を示すことができる可能性が残されている。

この調査への取り組みには次のような意図もあった。近年、大学間の競争は国内のみならず世界的に激しくなっている。こうした中で、発表される大学ランキングは多くの大学経営者の関心を集めている。ランキングには、論文数や引用数が大きく影響していることから、大手データベース会社による評価セミナーが盛んに開催されるようになり、そこへは有力大学の理事や研究戦略室の担当者も参加し、

その妥当性について議論が盛んに行われている²⁾。慶應義塾大学ではこうしたランキングに注視はしているものの、そこに踊らされることのないよう着実に研究成果を上げることが求められているが、明らかにされる内容に無関心ではいられない状況もある。日本学術会議の「学術統計の整備と活用に向けて」でも述べられているが、単純化されたランキングのみ囚われないために、その基礎的データに立ち返ることは重要であろう³⁾。そこで、理工学メディアセンターでは、こうした経営層に対する状況分析のためにも、研究者の研究業績の再整理が必要であると判断し、このことによってもメディアセンターの役割を認識してもらえる良いチャンスであると考えた。

一方、学内には、医学部で開発された研究業績データベースから発展した研究者情報データベース(KRIS)が存在している⁴⁾。そもそもKRISの開発は、研究助成を受けるための提出書類作成の省力化のために開発されたもので、研究成果を広く公開したり評価したりすることが目的ではなかった⁵⁾。そのためデータは毎年研究者自身によって更新されることが原則となっているが、データベース公開以降、データ項目や入力方法の改善がなされておらず、また、そのデータが研究者にとってどのように影響し有効に使えるのか理解されていないためか、更新がなされていないデータが少なくないばかりでなく、データの誤りも散見される。KRISデータは理工学部ホームページにおける研究者プロフィール⁶⁾にもリンクされている。文献データの管理はそもそも図書館が得意としてきた仕事である。各種データベースからのデータを流用し、しかも各著者の業績が同定でき、正しいデータの蓄積ができれば、研究者の時間確保に貢献できると同時に、このデータに更なる付加情報を加えることによって、研究活動に活用してもらうことも期待できる。

2 価値を示すための試み

この調査は当初からこれまでの経験を踏まえ、理工学メディアセンター自前で行うことは考えていな

かった。代表的大学ランキングの一つである QS 社へデータを提供しているエルゼビア社や、Times Higher Education 社へデータ提供を行っているトムソン・ロイター社からの提案もあり、データベース会社によって開発されているツールを用いて、研究者情報を再整理し、さらに付加的情報を得たいと考えた。幸い、2011 年度間接経費戦略的調整予算を獲得することができ、さらに、文献検索に必要な各研究者の英文表記、研究領域等の基本的情報を理工学部プロフィールデータから流用することができたため、第一段階における文献データの収集はすぐに開始することができた。現在は著者の同定の精度について検証中である。図 1, 2 はエルゼビア社のツールを使った業績データベースのイメージである。

個人の研究情報を調査するとともに、慶應義塾大学の研究力を他機関と比較するためにトムソン・ロイター社のツールも使い、学部長ほか数名の研究者からなる研究戦略のための会議体への情報提供も行っている (図 3, 4)。

3 第 2 歩へ向けて

研究業績を漏れなくダブリなく集めるためには著者の名寄せが鍵となる。より正確な名寄せのためにはそれなりのコストがかかる。そこで、ResearcherID⁷⁾という著者固有の番号を文献に付与することを推奨する研究組織も出てきた。データ整備をする側としては、こうした ID の利用は非常に合理的であるが、学部全体に利用を浸透させるためには、学部の方針として打ち出してもらうような働きかけが必要かもしれない。

今回のツールを使った研究業績には、日本語文献を含めていない。現在準備中と聞いている CiNii や JDream からのデータ流用が早急に実現されることが期待される。さらに、科学研究費補助金データベース等の研究費データも流用できるよう、NII や JST など関係各所との関係作りも重要だ。

インターネット以前の図書館では研究者との対話や雑誌を手にするので、さまざまな経験をすることができ、知らず知らずに特定分野の知識を深めることができた。雑誌が電子化された現在では、研究者との対話もほとんどなくなり、日々雑誌の表紙や目次を見て得ることのできた知識は全く違う方法や努力をしないと得られない。この作業を行うことで、

研究者の顔と研究内容が一致し、理工学分野の研究動向が見えてくる。このことは研究支援を一つの目標とする図書館員の育成に思わぬ効果が期待できそうである。しかしながら、分析自体はツールに依存するわけで、ツールを使った結果を示すことに終わってしまいそうな懸念はある。省力化の結果ではあるが、目的のためのデータ収集、データの読み方や分析力を備えた図書館員の育成はハードルが高い。

アウトプットとして完成するデータベースから、果たして図書館の価値を意図どおりに示すことができるかが最大の課題であるが、最終的に目標とするものは単なる業績データベースではなく、「研究管理システム」というべきものであることに気づいた。研究の質の高さを維持できれば、いい研究者や学生もおのずと集まるだろう。研究支援センターや国際連携室とも協力し、こうしたシステムが機能することで大学の使命が果たされれば、図書館の価値も見えるはずだ。理工学メディアセンター発の理工学部の一プロジェクトから大学全体の研究管理システムへと発展させることが次の課題かもしれない。

参考文献

- 1) Association of College and Research Libraries. Value of academic libraries.
http://www.ala.org/ala/mgrps/divs/acrl/issues/value/val_report.pdf, (accessed 2011-08-31).
- 2) RU11 学術研究懇談会声明文. http://www.hokudai.ac.jp/bureau/topics/110830_ru_seimei/ja_seimei.pdf, (参照 2011-08-31).
- 3) 日本学術会議. 提言 学術統計の整備と活用に向けて.
http://www.hokudai.ac.jp/bureau/topics/110830_ru_seimei/ja_seimei.pdf, (参照 2011-08-31).
- 4) 慶應義塾研究者情報データベース (KRIS). <http://www.k-ris.keio.ac.jp/>, (参照 2011-08-31).
- 5) 平吹佳世子. 慶應義塾大学医学部研究業績データベース. 医学図書館. 1997, vol. 44, no. 3, p. 378-379.
- 6) 慶應義塾大学理工学部・理工学研究科教員プロフィール.
http://www.st.keio.ac.jp/staff_search/index.html, (参照 2011-08-31).
- 7) <http://www.researcherid.com/>, (参照 2011-08-31).

理工学研究科専修
The Center for Applied Physics and Physico-Informatics
School of Fundamental Science and Technology

研究キーワード
による文献一覧表示

論文掲載最多
ジャーナル5件

Home
Overview
Research Profile
Publications
Journals
Institutional Network
Research Network
Research Trends

Experts
研究者名 文献数

研究者名	文献数
Shuichi ADACHI	54
Eitaro AIYOSHII	56
Tsunenori ARAI	280
Akiyoshi HATAYAMA	95
Junko HAYASE	43
Satoshi HONDA	176
Kahei M. ITOH	208
Yoichi KAMIHARA	84
Masanori MATOBA	52
Yoshinori MATSUMOTO	50
Teruo MIYASHITA	7
Eiji OHTA	86
Kazuo SHIIGI	60
Toshiyuki TANAKA	25
Kosuke TSUKADA	23
Takanori UCHIYAMA	31
Naoki YAMAMOTO	13

Research Profile
Silicon
Temperature
Superconductivity
Excitons
Isotopes
Lasers
Magnetization
Electrons
Germanium
Magnetic fields

Journals
Publications
Journal of the Physical S... 61
Physical Review B - Conde... 59
Proceedings of SPIE - The... 59
Journal of Applied Physic... 42
Physica B: Condensed Matt... 33

学内外の共同研究

Institutional Network
Internal Shared Pub. 97
The Center for Science and ... 36
The Center for Smart Device... 28
The Center for Chemical Bio... 6
The Center for Biosciences ... 5
External Shared Pub. 101
National Defense Medical Co... 101
Tokyo Institute of Technolo... 90

最新文献3件
Publications
1. Mitsuo Hirata; Sakae Noguchi; Shuichi Adachi
2011
Identification of a mechanical hybrid system switched by the absolute value of velocity or displacement
Electronics and Communications in Japan 2011;94(8):65-72.
2. A.R. Stegner; H. Tezuka; H. Riemann; N.V. Abrosimov; P. Becker; H.-J. Pohl; M.L.W. Thewalt; K.M. Itoh; M.S. Brandt
2011
Correlation of residual tensile concentration and

Explore the Research Trends

Explore the Research Network

図 1. データベースのイメージ

Home
Expert Overview
Profile
Publications
Similar Experts
Journals
Trends
Institutional Network
Coauthor Network
Research Network
Additional Activities & CV

Profile
Robots
Motion control
Control
Motion planning
Industrial electronics
Force control
Manipulators
Control systems
Controllers
Acceleration control

Trends
Explore the Research Trends

Research Network
Explore the Expert Network

研究者
Faculty of Science and Technology
Department of System Design Engineering

最新の発表論文
Publications
1. Hiroaki Kuwahara; Tomoyuki Shimono; Hiroyuki Tanaka; Daisuke Yashiro; Kouhei Ohnishi
2011
Abstraction of action components unconstrained by alignment of haptic sensing points
IEEE Transactions on Industrial Electronics 2011;58(3):3196-3204.
2. Shoyo Hyodo; Kouhei Ohnishi
2011
A method for haptic motion abstraction and display based on action force directionality
Electrical Engineering in Japan (English translation of Denki Gakkaishi Ronbunshu) 2011;176(2):62-70.
3. Sho Sakaino; Tomoya Sato; Kouhei Ohnishi
2011
Multi-DOF Micro-Macro Bilateral Controller Using Oblique Coordinate Control
IEEE Transactions on Industrial Informatics 2011(1):...

関連分野の研究者
Similar Experts
Seichiro KATSURA 175
Toshiyuki MURAKAMI 150
Hiroaki Nishi 71
Takahiro YAKOH 43
Toru NAMERIKAWA 63

Journals
IECON Proceedings (In... 107
International
IEEE Transac
Proceedings
IEEE Transac

発表ジャーナル(最多順)
学内外の共著者・機関情報

Institutional Network
Internal Organizations Shared Pub. 27
The Center for Comput...
The Center for Photon... 24
The Center for Multid... 1
External Organizations Shared Pub. 19
IEEE
Osaka Institute of T... 9
University of the Ry... 9
Tokyo Metropolitan I... 7
Aoyama Gakuin Univer... 7
Mie University 6

Coauthor Network
Internal Coauthors Shared Pub. 63
Toshiyuki MURAKAMI
Seichiro KATSURA 53
Hiroaki Nishi 26
Ryogo KUBO 24
Takahiro YAKOH 21
Kazuo NAKAZAWA 1
External Coauthors Shared Pub. 38
Tomoyuki Shimono
Kenji Natori 35
Sho Sakaino 32

図 2. 研究者ごとの詳細情報イメージ

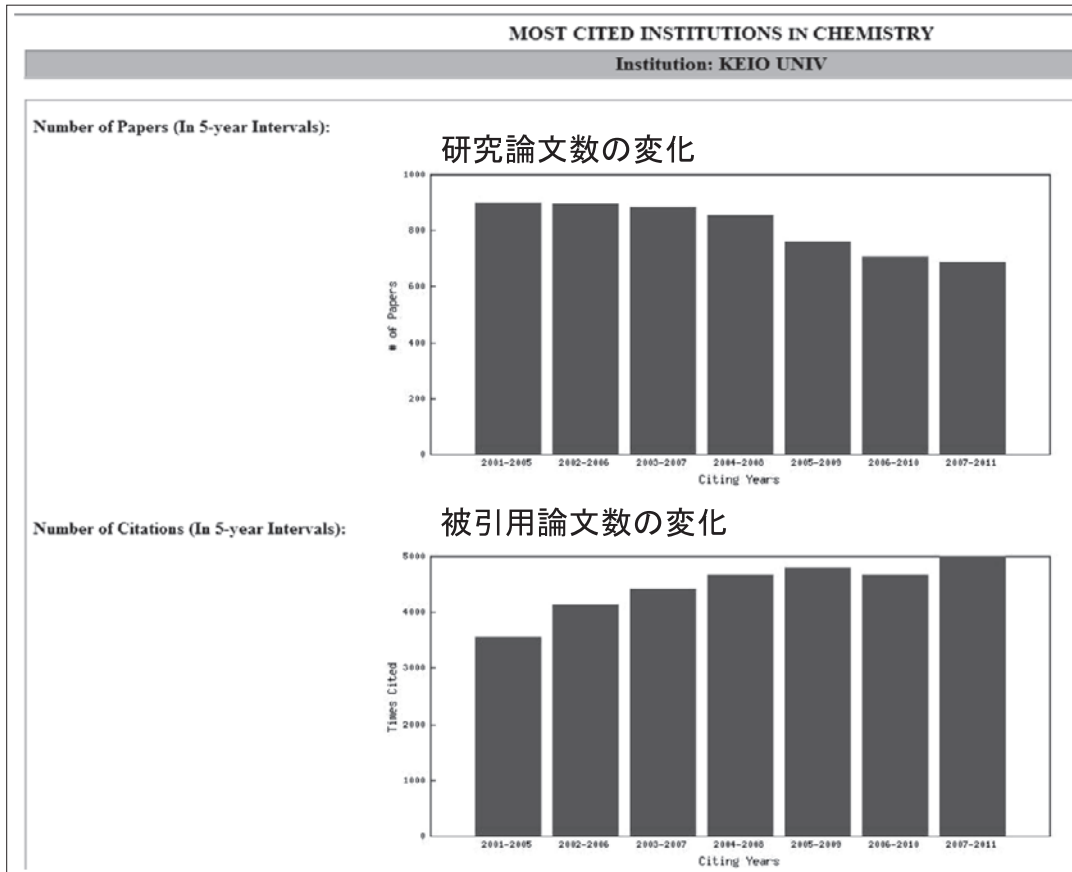


図3. 研究の経年変化データ

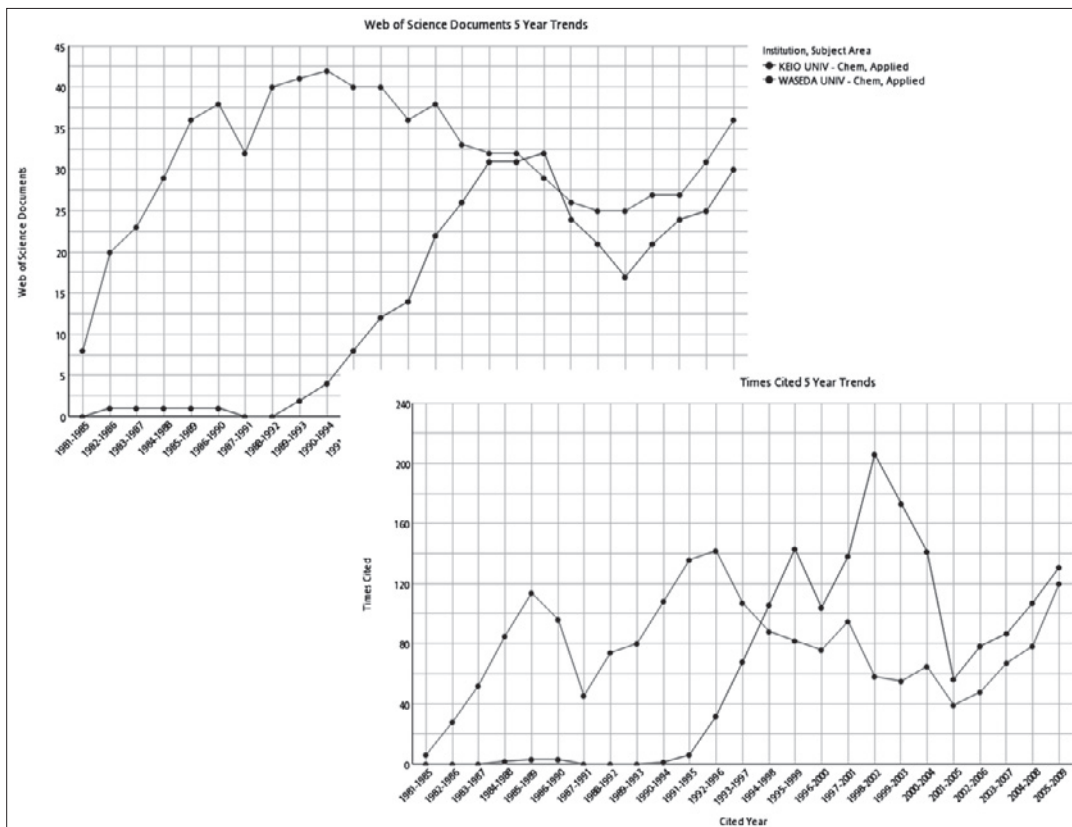


図4. 他大学との比較データ